

11 2025年に注目したい 11のクラウドの進化

—

次のステップを目指す企業を取り入れたい技術要素とは？
AIだけではない最新トレンド・テクノロジーをご紹介します。

目次

1. 強固なセキュリティをさらに安全に.....	4
パスワードレスへの移行	
2. AIエージェントが業務をサポート.....	6
AIエージェントのケーススタディ：レコメンデーション・エンジンの構築が驚くほど簡単に	
3. クラウド・パートナーシップによりマルチクラウドが さらに大きな価値を提供	7
4. 生成AIがクラウドネイティブ・アプリケーションの開発を支援.....	8
5. データレイクがクラウドに集約され、さらにスマートに.....	9
6. デジタル主権の重要性が急浮上し、 見逃せない課題をクラウド・プロバイダーがサポート.....	10
7. AIのトレーニングはクラウド上が定石に	11
8. クラウドベースのAI分析が予測を強化	13
9. 専門分野に特化したクラウド・プロバイダーが 地域や市場のニーズに対応.....	14
10. これまで以上にコストの透明化と最適化が可能に.....	15
11. 「クラウドファースト」戦略が、特にネットワーク・エッジで加速	16
オラクルが支援できること.....	17



クラウド戦略の強化： 2025年に押さえておくべき11の重要なトレンド

数年前まで、ハイパースケールのクラウドサービス・プロバイダーは、企業を囲い込む「ウォールドガーデン（閉鎖的な独自のエコシステム）」の2.0版を想定していました。しかし彼らは今、ビジネスリーダーが求めるのは、柔軟性、相互運用性、そして選択の自由だという現実を受け入れつつあります。

これらのビジネスリーダーは、実用的なAI機能、データ主権要件への対応、悪意ある攻撃を防ぎながら従業員の生産性を向上させる高度なセキュリティなども必要としています。そしてプロバイダーはこのような要求への対応を強化しています。

このeBookでは、2025年に注目されるクラウドサービスの進化と、企業が得られるメリットを紹介します。

1

強固なセキュリティをさらに安全に

ハイパースケーラーがセキュリティに数百万ドル（億円単位）を投資し、顧客データの保護に全力で取り組んでいることを、ユーザー企業は理解しています。しかし、セキュリティ対策は終わりのない攻防戦です。そのためクラウド・プロバイダー自信がこれらの新しい戦略やテクノロジーをいち早く導入する傾向があります。2025年にかけて登場するクラウドセキュリティの革新テクノロジーには、ゼロトラスト・パケット・ルーティングを備えたクラウド、AIを活用した脅威検出、強化されたID・アクセス管理などが含まれます。

その中でも特に重要な進展の一つが「ゼロトラスト・セキュリティモデル」の導入です。このモデルは「決して信用せず、常に確認する」という考え方に基づき、ファイアウォールの内側にすでに脅威が存在することを想定して、細かい権限設定によって攻撃のリスクを最小限に抑えます。システム資産を保護するには、ユーザー認証やアクセス許可の頻度を増やすとともに、ネットワーク内部での侵害の兆候を継続的に監視することが不可欠です。

ゼロトラスト・セキュリティの導入を検討している企業は、プロバイダーが機密データへのアクセス経路を明確に設定できるかどうかを確認する必要があります。その手段の一つとして、新しいネットワーク・セキュリティ手法である「ゼロトラスト・パケット・ルーティング（ZPR）」の活用が考えられます。一方で、ゼロトラスト・アーキテクチャの導入を検討中でない企業は、次のような理由から導入を再検討すべきでしょう。第一に、近年ではソフトウェア、サービス、ハードウェアの進化によって、生体認証など、パスワード以外の認証方法を利用する選択肢が増えていることがあります。



パスワードレスへの移行

ほとんどの企業は、クラウドやオンプレミスのリソースにアクセスするユーザーに対して多要素認証が必要であることを理解しています。現在、特に規制が厳しい業界では、「パスワードレス認証」と呼ばれる認証方法が注目されています。これは、パスワードを必要とせずユーザーの身元を確認する方法ですが、場合によってはパスワードが使用されることもあります。パスワードレス認証にはさまざまな技術が用いられます。たとえば、モバイル認証アプリを使った短期間のみ有効なワンタイムパスワード、生体認証、プッシュ通知に、SMSやメールで送信されるワンタイムパスコード、そしてYubiKeyのようなハードウェア・セキュリティ・トークンなどがあります。

パスワードの盗難やフィッシング攻撃のリスクを低減したいとお考えの場合は、クラウド・プロバイダーにパスワードレスへの移行方法について問い合わせることをお勧めします。導入を検討する際は、セキュリティを犠牲にすることなく、ユーザーにとってできるだけシンプルなログインプロセスを提供できるソリューションを選びましょう。



生成AIは、ゼロトラスト・アーキテクチャの実現を次のように支援します。

- 生成AI搭載の自動脅威検知システムは、大量のネットワーク・トラフィックやシステムログを分析し、異常や潜在的な脅威を特定し、許可されている場合はリアルタイムでそれらを阻止することができます。
- AIは、ユーザーの通常の行動パターンのベースラインを確立し、パターンを分析することで、たとえば盗まれた認証情報を使ってログインしようとしているような異常な活動を検知するのにも役立ちます。
- AIエージェントは、プロビジョニングおよびプロビジョニング解除のプロセスを自動化し、ヒューマンエラーのリスクを低減することができます。

さらに、AIエージェントは、それぞれのシステムやユーザーに必要最低限のアクセス権のみを付与することを徹底するのにも役立ちます。これはゼロトラストモデルの重要な原則の一つです。こうした要素が組み合わさることで、2025年はより多くの組織にとってゼロトラストモデルの現実味が増す年になると考えられます。

現時点でも、AIはクラウド・プロバイダーがネットワークトラフィック、クラウドリソースの使用状況、ユーザー行動、システムログを分析して異常、マルウェア、侵入の兆候を検出し、セキュリティチームにアラートを送るのを支援しています。2025年には、プロバイダーが予想しない設定変更を顧客に迅速に通知し、厳格な職務分離を実施しながら対応策を提案するなどの取り組みが進むと予想されます。

「Deloitteは、企業が暗号化を強化する際には、ゼロトラストの導入も検討すべきであると指摘しています。」¹

[ゼロトラスト・セキュリティの詳細](#)

2

AIエージェントが業務をサポート

貴社の各部門は、膨大な業務に追われていませんか？大規模言語モデル（LLM）は、スタッフの監督のもとで幅広い業務を遂行できる新しいAIエージェントの頭脳として機能します。

AIエージェントは、タスクを割り当てられると自らの環境を観察し、その役割と目標の範囲内で行動を起こします。過去のやり取りを記憶し、成果が良かったか、普通だったか、悪かったかに基づいて意思決定を洗練させていきます。高度なエージェントは人間の創意工夫を模倣し、自社アプリケーションやデータソース、API、他のエージェントなどのツールを使って目標達成を目指します。

ただし、こうしたエージェントは通常、自作できるようなものではありません。すべてのAIと同様に、エージェントは多大な計算能力とストレージを必要とします。また、多くの場合、ERP、在庫管理、人事、サプライチェーン管理システムといった業務アプリケーションの中で最大の効果を発揮します。テクノロジー・パートナーがクラウドでエージェントを提供する場合、特に、そのパートナーが貴社のデータを管理している場合には、パートナーがエージェントのトレーニングを行い、貴社が設定した制限内でエージェントが必要なデータにアクセスできるようにしてくれます。

2025年には、契約書作成、プロジェクト管理、会計、カスタマーサポートなど多岐にわたる業務を支援するAIエージェントが大量に登場すると考えられます。うれしい点は、各プロバイダーが導入、操作、監視のしやすさに重点を置いていることです。

高度なエージェントは、人間の創意工夫を模倣し、ツールを活用して目標を達成できます。

[AIエージェントの詳細](#)



AIエージェントのケーススタディ：レコメンデーション・エンジンの構築が驚くほど簡単に

クラウドを活用した代表的なユースケースのひとつが、顧客の購買履歴分析です。AIエージェントがCRMやERPスイートと統合され、顧客の行動に関するインサイトを提供し、マーケティングおよび営業活動の改善に貢献します。

AIエージェントは、顧客の属性情報や購買行動、製品の価格設定や在庫予測といったデータを取り込み、機械学習ツールを用いてパターンやトレンドを特定します。業務チームが関連性があると判断した要素に基づいて顧客をセグメント化した後、エージェントは予測モデルを適用して、行動を予測し、どの製品が特定の顧客層に購入されやすいかを見極めます。

さらに別のAIエージェントが、パーソナライズされたマーケティングメールを作成することも可能です。顧客生涯価値(LifeTimeValue)などのデータを収集することで、最も価値の高い顧客を特定し、営業部門に新たなビジネスチャンスとしてアラートを送ることもできます。

3

クラウド・パートナーシップによりマルチクラウドがさらに大きな価値を提供

「あの戦略的データさえ一緒に移行できれば、、、」と悔しく思いながら延び延びになっていたクラウド移行をついに実現する時がきました。

「現在、私たちは異なるクラウド間のサービスがスムーズに連携できる新たなフェーズに突入しています。クラウドはオープンになり、もはや『ウォールド・ガーデン』という概念は過去のものとなりつつあります。顧客には選択肢があり、複数のクラウドを組み合わせる時代が始まっています。」

ラリー・エリソン

オラクル会長兼CTO

2025年におけるマルチクラウド戦略とは、自社の主要データベースを任意のハイパースケール・クラウドで動作するアプリケーションに連携させて活用できる能力を意味します。これにより、ITリーダーは多様性がありながらも統合されたクラウド・ポートフォリオを実現できます。AWS、Google Cloud、Microsoft Azure、Oracle Cloud Infrastructure（OCI）といった主要クラウド・プロバイダーは、顧客がいずれのクラウドでもデータにフルアクセスできるよう提携を進めており、高額なデータ移動コストなしで利用できる環境が整いつつあります。お客様は現在、Oracle DatabaseをAWS、Google Cloud、Microsoft Azure上でマネージドサービスとしてネイティブに実行でき、レイテンシを低減しながら、予算編成やデータ・ガバナンスの簡素化を図ることが可能になっています。

89%

Flexeraの「2024 State of the Cloud Report」によると、現在、回答者の89%がマルチクラウド戦略を採用しています。²

クラウドはオープンになり、もはや「ウォールド・ガーデン」という概念は過去のものとなりつつあります。

[マルチクラウドの詳細](#)

² Flexera 2024 State of the Cloud Report

4

生成AIがクラウドネイティブ・アプリケーションの開発を支援

弊社の2024年のトレンドレポートでは、プログラミングの知識がなくても、ビジネス上の問題を解決するための軽量なアプリケーションを独自に作成できるローコードおよびノーコードプラットフォームについて取り上げました。2025年には、データベースや分析システムなどのクラウドサービスと簡単に統合でき、生成AIを使用して自然言語の指示に基づいてコードを生成する低コード・プラットフォームが登場するでしょう。つまり、ユーザーが作成したいものを説明すると、システムがその方法を決定するという仕組みです。

しかし、生成AIはさらに多くのことができます。2025年の進展の一つは生成開発であり、生成AIツールが企業の開発チームを支援し、ますます複雑化するコード作成を担当することになるでしょう。たとえばオラクルは、コードアシスタントの域を超え、AIにアプリケーション・モジュールを生成させて、人間がそれらをリンク、レビュー、編集できるようにする技術の開発に力を入れています。特に、AIは、マイクロサービスやコンテナなどの技術を使用して、クラウド固有のスケラビリティやその他の利点を活用するように構築されたクラウドネイティブ・アプリケーションの設計を支援することができます。

クラウドで実行できるようにアプリケーションをリファクタリングしたい企業に対しても、生成AIは役に立ちます。LLMはレガシーコードを調べ、その機能を説明することができるため、モノリシックなアプリケーションをより堅牢なクラウドネイティブ・アプリケーションに変換することができます。



67%

Forresterの2024年5月の「Artificial Intelligence Pulse Survey」によると、AI分野の意思決定者の67%が、来年には生成AIへの投資を増加させる予定だと答えています。³

生成AIは、自然言語の指示に基づいてコードを生成できます。つまり、ユーザーが作成したいものを説明すると、システムがその方法を決定するという仕組みです。

[クラウドネイティブについて](#)

5

データレイクがクラウドに集約され、さらにスマートに

データサイロは組織にとっての敵です。情報が分断されていると、その価値を十分に引き出すことはできません。2025年には、あらゆる情報源から得られる多様な構造化データおよび非構造化データを、一元的にアクセス可能なリポジトリに統合することを検討しましょう。

具体的には、インテリジェントなクラウドベースのデータレイクを活用することで、構造化・非構造化を問わず多様なデータタイプを保存・整理・分析できます。多くの企業がオンプレミスでデータレイクを構築してきましたが、クラウドのデータレイクには、スケーラビリティ、コスト効率、管理の容易さ、そして何より、アプリケーションがどこで稼働していてもすべてのデータに容易にアクセスできるという利点があります。クラウドは、データレイクのもう一つの重要な利点もサポートしています。それは、データを迅速に取り込み、人が要求した時にその場でデータを準備できることです。データレイクがクラウド上にあれば、ユーザーの場所に関係なくアクセスが容易になり、データ準備のための十分な処理能力も確保できます。

オープンデータ標準に基づいたデータレイクは、多様な入力に柔軟に対応できます。リアルタイム接続、迅速な変換、AIによるデータ準備、厳格なロールベースのアクセス制御など、すべて不可欠な機能が提供されます。2025年までにデータサイロを大幅に削減することで、より正確な分析が可能になり、より適切なビジネス上の意思決定を行うことができます。

オープンデータ標準に基づいたデータレイクは、多様な入力に柔軟に対応できます。

[オラクルのデータサービスの詳細](#)



6

デジタル主権の重要性が急浮上し、 見逃せない課題をクラウド・プロバイダーがサポート

データ主権とは、特定の地域内でデータの収集、保存、および利用を管理・規制できる能力を指します。これに対し、デジタル主権はより広い概念であり、データにとどまらず、ITインフラ、ポリシー、標準、サイバーセキュリティ手法の管理能力を指します。たとえ現在デジタル主権に対して特に懸念を持っていなくても、今後関心が高まったり、顧客やパートナーがすでに重要視している可能性があるため、注目すべきトレンドです。

クラウドの利点を享受しつつ、厳格なローカライゼーションと管理が求められる組織に対しても、プロバイダーが対応を進めています。たとえば、フルマネージドの専用リージョンを通じて、スケーラビリティや多彩なサービス/アプリケーションへのアクセスといった、パブリック・クラウドと同等の体験を提供しています。パブリック・クラウドと専用のプライベート接続を構築することもできますが、専用リージョンはそれ自体が独立した環境であり、独自のコンソールを使って管理され、必要に応じて自社スタッフによる運用も可能です。

現在ではこのようなサービスも中小企業にとって手の届く存在となっており、たとえば Oracle Cloud Infrastructure Dedicated Regionは、最小構成で3ラックから導入できるほか、Oracle Exadata Cloud@CustomerやOracle Compute Cloud@Customerは導入コストが低く抑えられています。データを自社で完全に管理できるため、データおよびデジタル主権に関するデータ保管、セキュリティ、接続性の課題にも対応しやすくなります。

たとえ現在デジタル主権に対して特に懸念を持っていなくても、今後関心が高まったり、顧客やパートナーがすでに重要視している可能性があります。

[Oracle Cloud@Customerの詳細](#)



7

AIのトレーニングはクラウド上が定石に

生成AIのトレーニングは計算資源を大量に消費することで知られており、ますます専門的なベンダーの領域となっています。企業は、基盤となるLLM（大規模言語モデル）を開発し、特定のタスクに合わせてファインチューニングを行うことができます。

クラウドは、これらの汎用的なLLMを取り込み、独自のモデルにするための場所です。クラウド・プラットフォームは、基盤となるLLMと、ベクトル・データベース管理、RAG（検索拡張生成）、その他の専門的なツールを提供し、開発プロセスを簡素化します。

以下は、**2025年**に知っておくべき**3つ**の進歩です。



ベクトル・データベース ベクトル埋め込みをネイティブに保存・管理し、ベクトルが説明する文書、画像、ビデオ、オーディオなどの非構造化ソース・データを処理します。AIを用いてデータのコンテンツを記述する数値表現（ベクトル）を作成することで、非構造化データが高度に検索可能になります。さらに、ベクトルと元のソース・データを同じデータベースに保存することで、文脈理解が向上し、データ来歴の追跡が容易になるため、情報の利用と分析の柔軟性が高まります。ベクトル検索を行うことで、非構造化データまたは複雑な業務データにおいて、類似したコンテンツの識別が容易になります。たとえば、見た目が似ている植物の画像を見つけたり、さらなる調査が必要な異常なコンテンツを特定することが可能です。



[検索拡張生成（RAG）](#)は、LLMの基盤モデル自体を変更することなく、最新かつ自社特有の情報を提供することで、出力の精度を最適化する手法です。生成AIシステムは、自社データを参照することで、プロンプトに対してより文脈に即した回答を生成できるようになります。たとえば、LLM単体では自社製品の売上状況はわかりませんが、RAGを通して売上データを参照できるようにすれば、より具体的で正確な回答が可能になります。



[ファインチューニング](#)とは、汎用的な生成AIモデルに対して、より小規模でドメイン特化型のデータセットで追加トレーニングを行い、モデルのパラメータを調整するプロセスです。これにより、特定の業界や組織固有のタスクにおいて、モデルのパフォーマンスを向上させることができます。たとえば、汎用のLLMは会計業務には不向きですが、FASB（財務会計基準審議会）のルールやその他の専門的なデータでファインチューニングされたモデルであれば、財務部門の支援に有効活用できます。

もうひとつの注目すべき新しいトレンドに、RAFT（検索拡張ファインチューニング）があります。これは、RAGとファインチューニングを組み合わせた手法で、特定の分野においてさらに関連性が高い回答を得ることを可能にします。RAFTは、自社の専有データを含む外部データソースに効率的にアクセスする手段を提供します。クラウド・プロバイダーの専門知識が必要になりますが、得られる結果は非常に高精度で有用、そして「驚くほど洞察に満ちた」ものになります。

たとえば、LLM単体では自社製品の売上状況はわかりませんが、RAGを通して売上データを参照できるようにすれば、より具体的で正確な回答が可能になります。

[RAGとファインチューニングの詳細](#)

8

クラウドベースのAI分析が予測を強化

クラウドベースのAI分析プラットフォームは、機械学習を活用して隠れたパターンを発見し、将来の傾向を予測し、非常に複雑なデータ分析業務さえも自動化します。このテクノロジーは、より迅速でタイムリー、かつ明確なインサイトを提供することで、2025年の意思決定プロセスを根本から変革しようとしています。予測的分析は従来のデータ分析でも使われてきましたが、今はいっそう、AI分析を可能にするクラウド・インフラストラクチャのスピードと計算能力の恩恵を受けるようになっていきます。その活用範囲は、業務の自動化、データセキュリティ、ロジスティクス、製品設計など非常に多岐にわたります。

クラウド・プラットフォームは膨大な量のデータを保存し処理できるため、チューニング・トレーニング済みのAIモデルは予測を行う際に多くの要因を考慮することができます。また、クラウドベースのAIツールは、より高度なアルゴリズムや手法を活用して、複雑なパターンやデータの相関関係を明らかにします。クラウドネイティブなサービスはスケーラブルで、企業のシステムとの統合も容易であり、ビジネスパーソンとデータ専門家がAI分析プロセスで協力できるようにします。

5年間の年平均成長率（2023-2028）に基づく上位AIユースケース（値（定数））⁴

ユースケース	年平均成長率(5年間)
拡張請求処理	+35.8%
デジタルコマース	+33.2%
拡張販売計画と見込顧客開拓	+32.8%
スマート・ファクトリー	+32.5%
拡張製品要件、設計、コラボレーション	+32.2%
その他	+28.6%

上記のAIユースケースから、あらゆる業種や規模の企業に大きな機会がもたらされることが分かります。

[AIと分析の詳細](#)

⁴ IDC, [Worldwide AI and Generative AI Spending Guide, V2 2024], 2024年8月。
データ: IDCのSpending Guideは、9つの地域と32か国、27の産業分野における42のユースケースのデータを提示することで、AIの可能性を定量化しています



9

専門分野に特化したクラウド・プロバイダーが 地域や市場のニーズに対応

新しいサービスやアプリケーション、または他のプロバイダーが満たしていない特定のニーズに関する素晴らしいアイデアをお持ちですか？ハイパースケーラーの新しいクラウド・インフラストラクチャ・プラットフォームにより、企業は自らがクラウド・プロバイダーになることができます。こうしたツールを使えば、自社のデータセンター内にカスタマイズされたクラウド環境を構築することができ、データやデジタル主権の要件にも対応できます。

もしあなたがプロバイダー側であるなら、自社ブランドでサービスを販売できるシステムを探しましょう。また、データの保存場所や顧客との関係を完全に管理でき、価格、料金表、アカウントの種類、割引スケジュールを自由に設定できる柔軟性も不可欠です。

一方、高度に専門化された、または地域に特化したアプリケーションを探している場合は、こうしたクラウド・プラットフォーム上でサービスを展開している革新的なプロバイダーを検討するとよいでしょう。たとえば、Oracle Alloyプラットフォームの利用者は、貴社の市場、地域、業界に関する深い理解を活かしながら、オラクル自身がサービス構築に使っているのと同じ開発・セキュリティツールを利用することができます。これは、専門家の知識と、大手クラウドベンダーのインフラの安心感が同時に手に入る、最高の組み合わせです。

高度に専門化された、または地域に特化したアプリケーションを探している場合は、小規模かつ革新的なプロバイダーを検討するとよいでしょう。

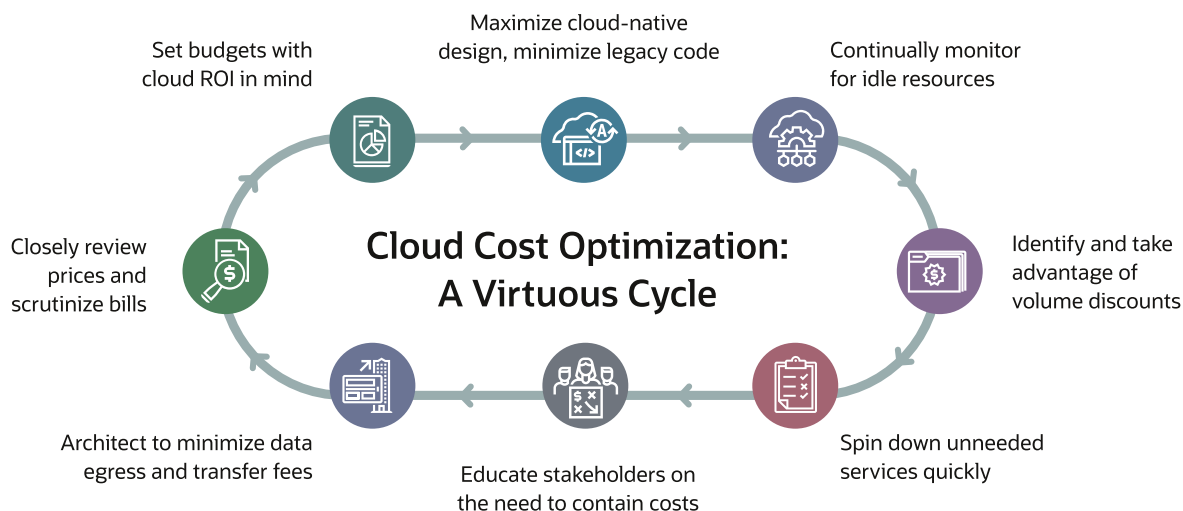
[Oracle Alloyの詳細](#)

10

これまで以上にコストの透明化と最適化が可能に

2025年には、貴社のITおよび財務部門は、クラウド支出に関するよりタイムリーかつ詳細なインサイトを得られるようになります。また、最適化の可能性を見つけ出す新たな手段として、生成AIの高度なクラウドコスト分析ツールを活用できるようになります。これらのシステムはクラウドリソースの使用状況を継続的に監視・分析し、パフォーマンスを損なうことなく支出を削減する方法を推奨します。また、コストを特定のチーム、プロジェクト、またはアプリケーションに割り当てたり、自動でレポートを作成したりすることも可能です。これにより、各部門は自分たちがコンピュートリソースにどれだけの費用をかけているのかを正確に把握できます。このようなインサイトは、売上原価のような指標を算出するうえでも、社内でのチャージバックやショーバックを検討している企業にとっても極めて重要です。

生成AIによるコスト最適化ツールは、さらに踏み込んだ提案も可能です。たとえば2025年には、特定のサービス構成を最適な構成にリサイズするための推奨事項を頻繁に受け取ることや、リソース予約の長期契約によって得られる割引に関するアラートなどを受け取ることができるようになります。



データ転送料金を最小限に抑えるには、必要な場所にデータを配置することが重要です。新しいクラウド間パートナーシップにより、それがより容易になります。

[クラウドコストの最適化の詳細](#)

11

「クラウドファースト」戦略が、 特にネットワーク・エッジで加速

IDCは2024年における全世界のパブリック・クラウドサービスへの支出が8,050億米ドルに達すると予測しており、その支出は2028年までに倍増すると見込まれています。⁵これはつまり、2025年からクラウドへのワークロードの移行が急速に加速するということを意味しています。この成長の多くは、ここで述べてきたトレンド、特にAIによって牽引されますが、より高度なデータ管理に対するニーズや、エッジ・コンピューティングの増加も重要な要素であるとIDCは述べています。

今回エッジ・コンピューティングを単独のトレンドとしては取り上げませんでしたが、この分野でもイノベーションが加速しています。たとえば、ポータブルなハードウェア・プラットフォームの進化により、ネットワーク・エッジや接続が不安定な場所でも、クラウド対応のコンピュートやストレージを提供できるようになっています。これらの堅牢なデバイスは、データ集約型およびAIワークロードを処理できる十分なパワーを備えており、石油掘削現場での予知保全、現場の救急隊員のためのリアルタイム分析、遠隔地の病院における患者データの常時監視といったユースケースを可能にします。これらすべてにクラウドは欠かせません。

3,780億ドル

IDCが予測する2028年までのエッジ・コンピューティングへの世界的な支出額。⁶

ネットワーク・エッジにおけるアプリケーションの成功のカギとなるのは低レイテンシであり、それにはクラウドが不可欠です。

[エッジ・コンピューティングの詳細](#)

[IDC Worldwide Spending on Public Cloud Services is Forecast to Double Between 2024 and 2028] 2024年7月29日
[IDC Worldwide Spending on Edge Computing Forecast to Reach \$378 Billion by 2028, Driven by Demand on Real-time Analytics, Automation, and Enhanced Customer Experiences] 2024年9月10日



Oracleが支援できること

お気づきかもしれませんが、2025年のテーマは「クラウドとAIのパワー」となるでしょう。Oracle Cloud Infrastructure（OCI）は、貴社が自社に最も適した形でAIを活用できるよう、包括的なAIポートフォリオを提供しています。さらにOCIの分散クラウドは、他のクラウド・サービス・プロバイダーにはない幅広いAI導入オプションを可能にしています。たとえば、OCIでは、Oracle Fusion ApplicationにAIを組み込むことで、生成AIがもたらすインサイトを貴社のさまざまな部門で活用できるようになります。また、企業が自社のアプリケーションにAIを組み込めるよう、OCIは、自社のビジネス・データを使用してカスタマイズできるモデルなど、さまざまなAIサービスを提供しています。

クラウド・コンピューティングがなければ、AIは今日のような発展はなかったでしょう。そして、2025年に期待されるクラウドの進化の多くは、AIによってもたらされます。Oracleをはじめとするクラウド・プロバイダーは、多種多様なAIモデルのトレーニングに必要なコンピュート・アーキテクチャを提供しており、企業がAIの能力を最大限に活用できるよう、さまざまな「導入ルート」を構築しています。

OCIの詳細

Oracleへのお問い合わせ

050-3615-0035にお電話いただくか、oracle.com/jp にアクセスしてください

そのほかの地域については、oracle.com/jp/contact で最寄りのオフィスをお探しくささい

Copyright © 2025, Oracle and/or its affiliates.このドキュメントは情報提供のみを目的としており、記載内容は予告なしに変更される場合があります。このドキュメントは、誤りがないことを保証するものではなく、口頭または法律で明示されているかどうかにかかわらず、商品性または特定の目的への適合性の黙示の保証および条件を含む、その他の保証または条件の対象ではありません。Oracleは、このドキュメントに関連するいかなる責任も明確に否認します。また、このドキュメントによって直接的、間接的に関わらず契約上の義務が生じることは一切ありません。このドキュメントは、Oracleによる事前の書面による承諾を得ることなく、目的の如何を問わず、電子的手段または印刷によるものも含めていかなる形式や手段によっても複製または送信することが禁じられています。Oracle、JavaおよびMySQLはOracleおよびその関連会社の登録商標です。その他の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

